

故・菅野正純さんの仕事と私

2011.08.17

2011年7月30日(土)

甦る菅野正純さん(元協同総合研究所主任研究員)の思い

私が出会ったなかでも数少ない異端の友(私と同系という意味ですが)だった菅野正純さん。最後は、日本労働者協同組合連合会理事長の任にあったが、数年前に夭折して、かえすがえすも残念至極のことだった。

しかし、今回私が書き始めようと思った「変わる高齢協・進むふくし生協」(「福祉生協さいたま—生活協同組合 さいたま高齢協」のニュース)の中身を検討し始めて、レジュメを立てたとき、ハタと思いだしたのは、彼のことば——「高齢者が元気に生きられるまちは、障がい者がすごしやすく生きられるまち」という複合的・ネットワーク的問題提起だった。

彼と一緒に編集した1990年代の『仕事の発見』(第Ⅱ期、隔月刊、日本労協連発行、B5判・48~64P)は、彼の理念——人間再生・地域再生・地域コミュニティーの再生、そして地域の協同・福祉社会の創造・協同労働論から始まった。

当時、まだ日本にはなかった「労働者協同組合」と「地域福祉社会をになう高齢者協同組合」を車の両輪のように作りだし、前者が後者を引っ張ることを目的にした雑誌だった。

彼の理念の現実化が、この10年間で、それもなんと高齢者協同組合自身の中から、内発的に始まっていることが、日本高齢者生協連合会の分厚い報告集にあった。

「コミュニティケアの推進」「小規模・多機能なデイサービスプラス宅老所を」「ケアホーム(共同生活介護)をつくりだす」「入居しやすい高齢者専用住宅づくり」「就労支援のための事業」「高齢者と障がい者を支えるモデル地域にしよう」「子育て安心サポートづくり」などである。

生きていてくれれば、その実証を見られたのに、という思いが強い。

もちろんこの雑誌の企画は故・中田宗一郎日本労協連専務理事の熱意がなかったら、あの時代に発行していなかったはずだ。

2011年8月4日(木)

故・菅野正純さんの思いの一端

菅野正純さんは2008年1月11日に亡くなった。その前年に倒れて入院加療中だった。

私たちにとって、2007年のときの入院については、「日本労協新聞」に発表されるまで知らず、あまりにも突然だった。その病院は何年か前、編集協力者のSさんのお見舞いに行った同じところ。

病院は、渋谷駅から都営バス・国学院大学経由で細い道をくねくね曲がって、15分ぐらいでいく。

着くと病室には家族がいなくて、彼と二人きりで対面した。

頭を坊主頭にして、言葉を発せない彼は、私の顔を見て、かすかな記憶をたどっているようだった。

私もその前年暮れ、1カ月の入院のあと、新年早々に手術をして、身体と精神の元気回復に努めていたときだった。

こちらから少し言葉を出したが、どこまで認識されたのか。彼のほほを思わずさわり、「早くよくなってくれよな」という言葉しか言えなかった。

家族にお見舞いに来たメモを残し、辞去したが、数ヵ月後、松沢常夫（「日本労協新聞」編集長）さんから「意識も少しずつはっきりしてきた」という朗報を聞いていたので、安心していたのに残念だった。

初めてあったのは1980年代初頭、松沢さんから、「イタリアの協同組合論を翻訳出版している」という紹介だった。

菅野さんと私は、歳が数年しか違わず、編集者生活では年下の著者としては、初めての人だった。

「へえー、イタリアね」というのが私の初印象だった。

出版界ではかの昔、イタリアの社会科学本をたくさん出した合同出版（現在の同名の出版社は、歴史的にはつながりがあるようだが、私の知り合いが引き取って、別の出版社となっており、数多くの本を出している）が著名だったが、その他では一部の研究者たちが「グラムシ」関係の論説を展開していただけだった。

但し、私はその少ない関係者の人との出会いがあったので、違和感は感じなかった。

しかし、「イタリア協同組合」についての知識は皆無だった。この後は別に書かなくてはならないな。

『仕事おこしのすすめ』（シーアンドシー出版）を書いていただいた京都大学名誉教授の池上惇先生は、追悼文の中で“菅野君は当時の流行的風潮には断固として反対し、イタリアの生産協同組合が現実には飛躍的な発展を遂げ、社会構造の中で、確固たる定位置を獲得していること、その理由は、労働の質が普通の企業とは違って「ともに働き、共に育ちあう」労働であることを発見した”（「池上惇ブログ文殊文庫便り」、2008年3月7日）

と書かれている。

また“しかし君は、労働者協同組合運動が地域に根ざし、各地の生命とくらしを守る現場の労働を組織して、ひろく市民やコミュニティの共感を得てきたことを自らの実践において示すことが出来た。

これは君が組織した労働が、人々の期待にこたえ、ともに育ちあい、人間としての創造性をにない得たからである。

さもなければ、このような支持は得られなかったであろう”、と（同前、3月8日）。

亡くなったあと、彼の遺稿集を出さないといけないのでは、と心に引っかかりながら、私自身、出版社を閉じて、その精神的元気さがなく、今日まで来てしまった。

菅野さんが『仕事の発見』（第2期）に書き続けた原稿とそのテーマについて——高齢者・障がい者・子ども・青年を協同の力で、ネットワークして社会的排除をゆるさない「地域福祉を創造する協同組合」づくり——知っていただきたく、別のページにリストを編んでみた。

日本労協連に行けば、読めるはずだ。

2011年8月4日（木）

故・菅野正純さんと『仕事の発見』誌

世の中、毎年、何万点と出版物が出され、その多くはベストセラーになるわけではなく、特に社会科学系の出版物は「多品種少量生産」が、その特徴である。

ここに紹介する、『仕事の発見』誌（第2期）も自立した雑誌にはならなかったが、そのマイナーな出版物に个性的に人生をかけた菅野正純（協同総合研究所主任研究員）さん（と私）の仕事（上段が特集、下段が彼が問題提起した原稿）。

1993年12月号 創刊号 特集 21世紀をめざす労働者協同組合

この人に聞く 池上 淳『生活の芸術化』が投げかけること

1994年2月号・第2号 特集 高齢者協同組合をめざして

〈高齢者福祉を考える〉”協同”の力で日本の福祉を高めよう

1994年4月号・第3号 特集 エコテック式仕事おこしが投げかけるもの

〈高齢者福祉を考える〉続「協同」の力で日本の福祉を高めよう

1994年8月号・第5号 特集 労働者協同組合への招待 教科書づくりのために

労働者協同組合教科書（案）の構成

1994年10月号・第6号 特集 「協同集会」が投げかけたこと

始まった壮大な協同のうねり

1995年1月号・第7号 特集 いま「人と地域に役立つ、新しい働き方と協同の仕事おこし」を

座談会：名古屋協同集会を終えて

1995年3月号・第8号 特集 よい仕事をめざして

生命の再生・労働の再生—いま「よい仕事」を問う

1995年7月号・第10号 特集 仕事おこしの経営とは
社会の再生とイタリア協同組合運動

1995年9月号・第11号 特集 高齢者協同組合をつくろう
高齢者が主人公になった生活づくりを——高齢者協同組合の側からの政策提案の視点

1996年3月号・第14号 特集 非営利・協同の仕事おこし、高齢協づくり
「生活の発見」「仕事の発見」——高齢者協同組合と労協の仕事おこし

1996年5月号・第15号 特集 公的介護保険と高齢者協同組合
公的介護保障システムへの「非営利・協同」からの提案

1996年5月号・第16号 特集 高齢者と非営利・協同事業
非営利・協同の立場から的高齢者介護の方向

1996年11月号・第18号 特集 東北からの発信——仙台協同集会へ
「宮沢賢治生誕百周年」に「協同」を問う

1997年3月号・第20号 特集 新しい時代の仕事おこし・まちづくり
「協同の労働」を新たな権利へ

1997年5月号・第21号 特集 労働者協同組合法と新しい仕事おこし
「新しい公共性の創造」に向かって

1997年7月号・第22号 特集 AARP、社会的協同組合、そして労協法
「協同労働」を基礎に労協法の制定

1997年9月号・第23号 特集 新しい福祉社会の創造めざして
「福祉」がひらく労協の新展開（上）

1997年11月号・第24号 特集 地域における「福祉社会の創造」
「福祉」がひらく労協の新展開（下）

1998年1月号・第25号 特集 「福祉社会の創造」を担う
根本的な対案を示したイギリス協同運動

1998年3月号・第26号 特集 地域は労協・高齢協の宝庫——福祉も仕事も
イギリス労働者協同組合とコミュニティ協同組合

1998年5月号・第27号 特集 高齢者協同組合と共済
「協同・共生」への胎動の中の高齢者協同組合

1998年7月号・第28号 特集 自治体とのいい関係づくり
自治体から始まった「福祉社会の創造」への胎動——そのパートナーとなる「地域福祉事業所」へ

1998年9月号・第29号 特集 東北の地から《高齢協》の新しい風
《座談会》地域を元気にする地域福祉事業所づくり——地域福祉事業所と地域福祉

沢田清方・菅野正純・古谷直道・岩浅えり子

1998年11月号・第30号 特集 21世紀を切り開く広島協同集会
21世紀——根源を問い、「協同組合の時代」来る

1999年1月号・第31号 特集 広島協同集会、そして介護者ネットワーク
「介護者ネットワーク」がめざすもの

1999年3月号・第32号 特集 高まれケアワーカーの仕事
「ケアの時代」と労協の“飛翔”——労協の「地域福祉事業所」の意義

1999年5月号・第33号 特集 上海市高齢委員会を訪ねて
欧州労働者協同組合・社会的協同組合の挑戦

1999年7月号・第34号 特集 CC共済の発進とボランティア

提言 コミュニティ再生と大量失業克服のために——労働者協同組合法の一刻も早い制定を

2011年8月4日（木）菅野正純さんの思い | 固定リンク | トラックバック (0)

2011年8月6日(土)

『仕事の発見』誌の横軸―「泊まりのできる小規模デイサービス」(宅老所づくり)

先日(7月26日)に「ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟」(新潟高齢協)の民家改造型デイサービス+泊まりもできる施設・「ささえ愛あわやま」を福祉生協さいたま(生協 さいたま高齢協)のみんなと訪問した。

「ささえ愛あわやま」は、06年に改定された介護保険法に基づく「小規模多機能型居宅介護事業所」として新潟市で最初に指定を受けたところ。

詳しいことは次回に書きたいが、菅野正純さんと協同編集した『仕事の発見』(第2期)誌は、前述の「故・菅野正純さんの思いの一端」が縦軸ならば、横軸は「コミュニティ・ケアづくり」+小規模の「宅老所・グループホームづくり」だった。

その流れは以下の企画のとおり。

『仕事の発見』誌の休刊からほとんどあきらめていたテーマが、実は福岡ふくし生協(福岡県高齢者福祉生協)や「ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟」(新潟高齢協)で実践されていることに、両高齢協とも読者ではなかっただろうが、編集者としては感激だ。

さらにいま、「ふくし生協」として発達している事実を、学んでいきたい。

1993年12月号 創刊号

町のなかの労働者協同組合 私たちが高齢化社会を支える/伊丹ヘルプ協会の女性パワー ●柴野徹夫

1994年4月号・第3号

市民の力で宅老所「よりあい」開設/福岡市中央区 下村恵美子さんグループ

1994年10月号・第6号

男性ヘルパーはやりがいのある仕事/横浜 男性ヘルパー会

1995年1月号・第7号

時代の大きな転換を切り開く女性達の仕事おこし●千葉大学・佐藤和夫

地域で安心して高齢期を過ごしたい/東京田無サポートハウス年輪

1995年3月号・第8号

ボケても、住み慣れた町で普通に暮らし続けたい―宅老所「よりあい」(福岡市) ●藤本とも子

1995年7月号・第10号

「子育て協同組合」から「子どもコープ」へ ●藤岡貞彦

1995年9月号・第11号

労働者協同組合のヘルパーになろう●藤本とも子

心のヘルパーになろう・精神対話士・―高齢者の心とコミュニケーション●藤本千秋

ルポ・ヘルプ協会(伊丹)の活動●金澤裕美

ワーカーズ・コレクティブの活動●矢吹紀人

1996年1月号・13号

ヘルパーのすすめ●木下安子

1996年3月号・第14号

命にかかわることは利益組織に任せられない——粕屋の老人給食事業●樋口圭子

共感を得られるヘルプ活動をめざして——愛知・「あいちヘルプ協会」●藤本とも子

1996年5月号・第15号

仲間をひとりぼっちにしない、「たまり場」をつくろう——愛知県高齢者協同組合●藤本とも子

1996年7月号・第16号

24時間・365日在宅ケアを実践する「年輪」●安岡厚子

町田における労協・ケアワーカー「けやき」●小菅恵子

伊丹を中心に180人を超える労協ヘルパー集団とその挑戦●木谷勝彦

ルポ 街の中にデイケア・高齢者施設づくり——特別養護老人ホーム「ラポール藤沢」●榊山英信

1997年3月号・第20号

■カメラ・ルポ 仕事発見——愛知高齢者協同組合デイスサービス「へいわ」●写真／五味明憲

1997年7月号・第22号

■カメラ・ルポ 仕事発見——北海道のグループホームづくり・元気舎●写真／五味明憲

◎レポート 北海道におけるグループホームづくり——住み慣れた土地で心のふれあいを大切に、最後まで輝いて生きたい ●内沢千恵

1997年9月号・第23号

表紙 元気舎（旭川、道北高齢者・障害者協同組合）と老人保健施設「かたくりの里」（北海道労協）

公的介護保険と私たちの地域保健福祉運動——グループホームなど●中田宗一郎

■研究室の窓から 宅老所のすすめ——どの地域にもできる高齢者の生活の場づくり●賀戸一郎

1997年9月号・第24号

◎インタビュー 伊丹における都市型ケアハウスづくり●木谷勝彦

■協同の息吹き “市民立”の高齢者福祉施設——ケアセンターあさひ・群馬県厚木市 ●長岡義幸

1998年1月号・第25号

■カメラ・ルポ 仕事発見

沖縄高齢協の高齢者給食事業●写真／五味明憲 文／●古波蔵保吉

■協同の息吹き 福祉と医療と生活が一体のコミュニティづくり——ニコニコ生活村・大分県大野郡三重町 ●樋口圭子

1998年3月号・第26号

■協同の息吹き デイスサービスからミニデイホームづくりへ——デイスサービスいずみ・東京都保谷市●榊山英信

■地域からの協同の発信②

デイスサービスは“ライフサービス”——宮城県涌谷町の保健・医療・福祉の連携 ●熊谷智美

1998年7月号・第28号

■協同の息吹き 40カ所をこえる宮城の宅老所ネットワーク——みやぎ宅老連絡会・宮城県 ●熊谷智美

1998年7月号・第29号

《座談会》地域を元気にする地域福祉事業所づくり——地域福祉事業所と地域福祉●古谷直道・岩浅えり子・沢田清方・菅野正純

■ルポ：協同の息吹き 急速にすすむグループホームづくり——神奈川県横浜市の実践 ●栗原みどり

1998年9月号・第30号

子どもを軸にした新しい協同・共生 ●毛利 葉

1999年3月号・第32号

《ルポ》宅老所・グループホームのネットワークづくり ●熊谷智美

1999年5月号・第33号

町田のワーカーズコープけやきの活動 ●写真／五味明憲

1999年7月号・第34号

◇講演——高齢者とボランティア活動 ●神代尚芳

◇ボランティア活動と高齢協

配食サービスに参加して ●西山伸子

生涯学習介護講座開設を出発点として ●内田利昌

高齢協の協力者とボランティア ●深水昭子

2011年8月6日(土) ふくし生協(高齢協) | 固定リンク | トラックバック (0)